

I-③ いじめに関する社会貢献活動

(上越教育大学)

活動名	新潟県立教育センター教職 12 年経験者研修 「全体研修 1 いじめの基本的認識と学校の説明責任」講師
対象者	教職 12 年経験者
実施期間	2012 年 7 月 27 日
活動場所	上越市市民プラザ
教員名（専門分野） 関係者等	山本 隆一郎（臨床心理学） 新潟県教育委員会
参加者数	50 名
活動の目的	昨今の教育現場におけるいじめ問題の深刻さに鑑み、中堅教職員を対象にいじめ問題の現状の理解、いじめ問題の臨床心理学的理解、学校全体での取り組みのあり方（説明責任・法的問題も含む）に関するの最新知見を共有するために企画されました。
成果	学校と地域とが連携しいじめを未然に防ぐような環境作りの取り組み、いじめの対応に関して、教員としてどのような点に留意をするのか（子どもが社会化の過程で必要な対人摩擦か、法的な権利侵害に該当するかなど）に関する情報を共有できた。
<p><b>【活動内容】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆研修会講師紹介</li> <li>◆研修会「いじめの基本的認識と学校の説明責任」（1 時間半実施） 講師：山本隆一郎（上越教育大学大学院）</li> <li>◆質疑応答</li> </ul>	

## I-③ いじめに関する社会貢献活動

(上越教育大学)

活動名	いじめを生まない学級経営に関する研修会
対象者	新潟市立女池小学校職員
実施期間	平成24年12月27日(木)
活動場所	新潟市立女池小学校
教員名(専門分野) 関係者等	赤坂 真二(学級経営, 教育相談, 生徒指導) 新潟市立女池小学校
参加者数	30名
活動の目的	新潟市立女池小学校では, いじめの未然防止・早期発見を目指し, 学級づくりに役立てていくため研修会を開催し, いじめを生まない学校経営をどのように行っていけばよいかについて研修します。
成果	
【活動内容】	

I-③ いじめに関する社会貢献活動

(富山大学・人間発達科学部)

活動名	いじめ・不登校対応研修会
対象者	高岡市内各小・中・特別支援学校教員
実施期間	2012年8月1日
活動場所	ふくおか総合文化センター
教員名(専門分野) 関係者等	久保田 真功(教育社会学) 高岡市教育センターによる企画・実施
参加者数	49名
活動の目的	いじめおよび不登校に対する理解を深めてもらうとともに、そこで得られた知見を現場に還元してもらうことにより、効果的な実践を展開してもらうこと。
成果	

【活動内容】

いじめおよび不登校がなぜ生じるのか、という点について、理論や統計的データをまじえて説明した。また、不登校については、以前に富山県教育委員会の委託を受けて作成したプログラムをグループ単位で実施した。

研修会の様子は、以下の高岡市教育センターのホームページにアップされている。

[http://www2.schoolweb.ne.jp/weblog/index.php?id=1650002&type=1&column\\_id=492899&category\\_id=9368](http://www2.schoolweb.ne.jp/weblog/index.php?id=1650002&type=1&column_id=492899&category_id=9368)

I-③ いじめに関する社会貢献活動

(金沢大学・人間社会学域 学校教育学類)

活動名	石川県 PTA 連合会 いじめ対策特別委員会
対象者	石川県内の小中高校に通う児童生徒の保護者
実施期間	平成 24 年 11 月～平成 25 年 3 月
活動場所	—————
教員名 (専門分野) 関係者等	原田 克巳 (臨床心理学) 石川県 PTA 連合会・石川県教育委員会など
参加者数	7 名 (特別委員会委員数)
活動の目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いじめ問題についての保護者向けの啓発リーフレット (もしくは手引き) の作成。</li> <li>・いじめ問題の未然防止や問題解決について, 警察, 教育相談機関, 行政などの関係機関に対して, 協力要請や要望を行う。</li> </ul>
成果	
<p><b>【活動内容】</b> いじめ問題は喫緊の課題であり, 未然防止, 事後の適切な対応がよりいっそう求められている。また, 学校・家庭・地域が一体となって対応に当たることが必要とされている。</p> <p>①いじめをする子に育てないために, またいじめに遭っている子を守るためにどうしたらよいのかという, 保護者の不安にこたえていくことが PTA の使命の一つでもあり, 「いじめる子をつくらない。いじめを受けている子を守る」というメッセージを広く発信するために, 悩める保護者の立場に立った, いじめ問題についての啓発リーフレット (あるいは手引き) を作成する。作成予定のリーフレットの骨子は以下の通り。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) わが子をいじめの加害者にしないために</li> <li>2) いじめを早期に発見するために</li> <li>3) 身の回りにいじめ (と思われること) があることを知ったときに</li> <li>4) もしわが子がいじめの被害にあったなら</li> </ol> <p>②いじめの未然防止, 対応には, 学校と家庭の力だけでは困難な場合もあるため, 警察, 教育相談機関, 行政など各方面の力を借りる必要もあり, そのような関係機関に対して PTA の立場から養成や要望を行う。</p> <p>原田は, このいじめ対策特別委員会において, 学識経験者として参加し, リーフレットの作成等について助言を行う。</p>	

I-③ いじめに関する社会貢献活動

(金沢大学・人間社会学域 学校教育学類)

活動名	石川県いじめ対応アドバイザー派遣事業
対象者	石川県内の派遣を希望する公立学校
実施期間	平成 24 年 10 月～
活動場所	県内公立学校
教員名（専門分野） 関係者等	原田 克巳（臨床心理学） 石川県教育委員会・石川県臨床心理士会，弁護士，医師など
参加者数	60 名程度（登録アドバイザー数）
活動の目的	平時からいじめ問題に備え，いじめを見逃さず，学校がいじめを把握したとき，迅速かつ積極的対応が行われるよう，学校がいじめ問題に対する支援の強化に資する。
成果	

【活動内容】 石川県教育委員会は，県内公立学校に対して，家庭・地域等との連携を図りながら，いじめへの対処方針や指導計画等を公表し，保護者や地域住民の理解を得るよう努めるとともに，いじめの問題について協議する機会を設け，いじめの根絶に向けて地域ぐるみの対策を進めることを求めており，各公立学校内に，常設のいじめ問題対策チームを設置するよう求めている。

アドバイザーは，このいじめ問題対策チームから対応の助言を求められた際に当該校に派遣され，学校内での解決に向けた助言を行う。

原田は，いじめ対応アドバイザーに対して，助言を行うとともに，アドバイザーとしても活動を行う。

I-③ いじめに関する社会貢献活動

(福井大学・教育地域科学部)

活動名	教育相談「子どもの悩み 110 番」
対象者	主に小・中・高校の子どもを持つ保護者
実施期間	年 3 回 (5 月・9 月・3 月)
活動場所	5 月と 9 月は福井大学、3 月は敦賀市プラザ万象と小浜市チャンネル O コミュニティセンター
教員名 (専門分野) 関係者等	森透 (臨床教育学・教育実践史)、その他教育臨床心理学を専門とする福井大学教員と福井弁護士会に所属する弁護士で、全部で 10 名程度。
参加者数 (相談件数)	1993 年 7 月から開設して、今年 9 月で 66 回目、相談件数は 1225 件。うち「いじめ」関係が 81 件、不登校が 450 件。
成果	① 基本的に相談者の氏名・連絡先等は聞かず、相談内容を一緒に考え解決に向かうためのアドバイスを行う。相談者が少しでも納得し展望が見出せるためのお手伝いを行う。 ②かなり深刻なケース (たとえば「いじめ」で学校側の対応が悪い場合) は、氏名及び学校名等を聞き、後日学校と連絡を取り、解決のために行動を起こす。今までの「いじめ」の深刻なケースでは、第三者として学校と保護者の間に入り、問題解決に当たったこともある。
<p>【活動内容】</p> <p>5 月是一日 (福井大学会場・13 時—21 時)、9 月は 2 日間 (福井大学会場・13 時—21 時)、3 月は敦賀市 (プラザ万象会場・13 時—21 時) と小浜市 (チャンネル O コミュニティセンター・10 時—20 時) で一日ずつ連続開催。面接相談もある関係で、福井市以外の場所でも開催している。1993 年から 2012 年まで現在 66 回開催している (別紙資料参照)。</p> <p>相談者は小学生・中学生・高校生の子どもをもつ保護者 (特に母親) が多い。電話相談と面接相談の 2 つがあり、相談者が自由に選べる。相談は無料。相談内容の約 3 割は不登校の相談である。いじめに関しては 81 件であるが、不登校の原因がいじめにあるケースもある。電話又は面接だけで解決しない場合は、スタッフが後日関係する機関 (学校等) に出向き、具体的解決のために相談を行い、解決のための取組みを行う。相談結果については守秘義務を前提として、そのつど県庁で記者会見を行い、社会 (学校・家庭・地域) に対して警鐘を鳴らしている。</p>	

I-③ いじめに関する社会貢献活動

(信州大学・教育学部)

活動名	学生主体の地域貢献活動「信大 YOU 遊興譲館」
対象者	いじめにより不登校となった中学生 10 名
実施期間	2002 年 3 月～2003 年 11 月
活動場所	信州大学教育学部北西校舎（旧附属長野小の空き教室「松」）
教員名（専門分野） 関係者等	土井進（教師教育学） 学生スタッフ 24 名
参加者数	不登校の中学生 10 名
活動の目的	信州大学教育学部キャンパスに中間教室の性格を有する「信大 YOU 遊興譲館」を開設し、学生スタッフが授業の空き時間を活用して交代しながら不登校生徒と日常的に関わることによって、社会力の向上を目指した。
成果	<p>不登校になり他者との関わり不全の状態にある中学生は、「社会力」を有している大学生や大人が彼らと共に汗を流し、人と人がつながる体験の場を共有することが重要である。「信大 YOU 遊興譲館」を卒業した中学生は、多くの他者を自分の中に取り込み、自分を見つめ直し、自己肯定感や自信を持つことができた。それは彼らが大学生・教員・地域の人々とふれあい、実際に汗を流す体験を積み重ねた結果であると考えられる。</p> <p>小学校 5 年から不登校になり、中学校へは 1 日も行かなかった生徒が高校進学を成し遂げた。10 人が全員高校に進学し、その後、大学進学も果たし、現在は社会人として活躍している。</p>

## 【活動内容】

1. **調理実習**：興譲館における中学生の昼食の実態は、カップラーメンなどの粗末なものであった。そこで、彼らが自らの食生活を見直すきっかけになればうれしいという願いから、2002年10月12日より家庭科専攻の学生が中心となり、調理実習の時間を設けた。以下に実際に行われた献立を掲げる。

10月25日（金）：親子丼、とうふとわかめの味噌汁、ほうれんそうの胡麻和え

11月1日（金）：さやいんげんの胡麻和え、さばの味噌煮、豚汁、

11月29日（金）：だまっこ鍋、

12月20日（金）：レアチーズケーキ、スパゲッティミートソース、白玉スープ、

12月27日（金）：コーヒーゼリー

## 2. 興譲館 OK 牧場での農作業体験

「松」の部屋の隣にある武道場の脇にある畑を耕して OK 牧場と名付けた。ここでの活動は以下の通りであった。

2003年4月14日（月）：土に埋まったブルーシートを取る作業。中学生に土に触れさせたい。土の重みを知ること。スコップの扱いに慣れること。10分間のお茶休憩をする。

4月21日（月）：土起こし、畑づくりの基本を行う。

4月28日（月）：じゃがいも植え、うねの作り方を知る。鍬の使い方を知る。

5月12日（月）：とうもろこし植え

5月19日（月）：さつまいも植え、5月26日（月）：プチトマト植え。その他、草取り、間引き、土寄せ、追肥などを行い、作物に対する愛情を育てる。

OK 牧場での収穫は、じゃがいも 5.6 キロ、とうもろこし 15 本、さつまいも 12 キロ、ミニトマトは 10 本植えたが食べきれないほどであった。10月9日にさつまいもで焼き芋を行った。落ち葉と小枝を拾い集め、新聞を濡らし、アルミホイルで包んだ。この実践で何よりもうれしかったことは、不登校生たちが収穫したものを本当においしそうに喜んで食べている笑顔が見られたことである。

## 3. サッカーを通しての社会力の育成

興譲館に中学生が 5 人以上集まった時は、自然と全員がグラウンドで遊ぶことが多かった。そこで行った遊びは野球とサッカーであった。彼らは外で遊ぶことを、学習の時間はもちろん体験活動の時間よりも楽しみにするようになっていった。サッカーの指導に携わった学生は次のように述べている。

「実際サッカーを行った中でのある子の変化には驚かされました。最初は夏休みの時で、決して自分から勝負を挑んでくるような子ではないと思っていたのですが、その子の方から私に対してドリブルの 1 対 1 を仕掛けてきました。次は 10 月の頃で、興譲館にきた当初の物静かな印象からはまるで想像できない事なのですが、一緒にやっていた子に対して、「パスくれっつーの！！」と大声で叫んで意思表示しました。最後は 12 月の頃で、サッカーをやり始めた当初は、自分で蹴って外してしまったボールを取りに行くのも」渋っていたその子が、他の子がシュートして外してしまったボールを当然のように何の苦もなさそうに走って取りに行きました。」

参考文献：土井進・丸山大輔（2005）「信大 YOU 遊興譲館」における不登校生徒の「社会力」の向上」信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要『教育実践研究』No.6, pp.61-70

土井進編著（2003）『第 2 期「信大 YOU 遊広場」の実践—臨床の知を求めて—』p.125,p.24, 信州大学教育学部